

スローイング能力からみる大学野球選手の特性

研究代表者 鈴木智晴（鹿屋体育大学スポーツパフォーマンス研究センター）

メンバー 藤井雅文（鹿屋体育大学）

目的

本事例は、本学の大学野球選手のスローイング能力向上を目的とした取り組みの1つで、スローイングテストを行いスローイング能力の定量化を図った。テストで定量化されたスローイング能力をもとに本学の大学野球選手の特性を紹介する。

方法

1. 対象者

対象者は大学野球選手44名（投手12名、捕手6名、内野手11名、外野手15名）であった。

2. 測定内容および測定方法

対象者は①的あり助走なしで全力投球を行うテスト（スローイングテスト）、②的なし助走ありで全力投球を行うテスト（プルダウン）の2種類を実施した。スローイングテストでは、Trackmanを用いて球速と的からの距離（コントロール）を測定し、10球の平均値を算出した。プルダウンでは、スピードガンを用いて球速のみ測定し、最大値を採用した。対象者をポジションごとに群分けし、それぞれのスローイング能力を検討した。

結果および考察

1. ポジションごとの球速およびコントロール

図1にポジションごとの球速を示した。また、図2にポジションごとのコントロールを示した。球速は捕手、投手、外野手、内野手の順に高く、コントロールは内野手、捕手、投手、外野手の順に良かった。内野手において以上の結果が得られた要因として、他のポジションに比べて、投球速度よりもコントロールが重要視されるためであると考えられる。特に打ち取ったゴロを正確な送球で確実にアウトにすることが求められるポジションであることが影響していると考えられる。加えてプルダウンにおける球速が低いことから、投球速度を生み出すための身体の使い方に課題がある可能性が考えられる。

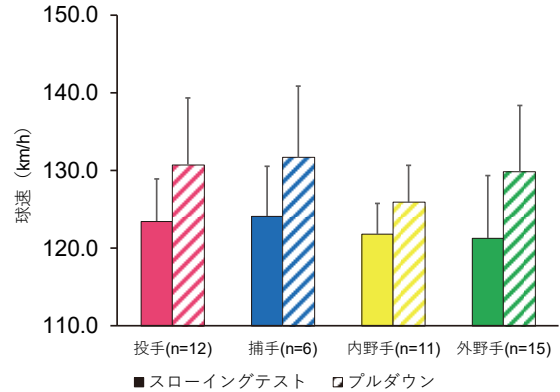


図1: ポジションごとの球速

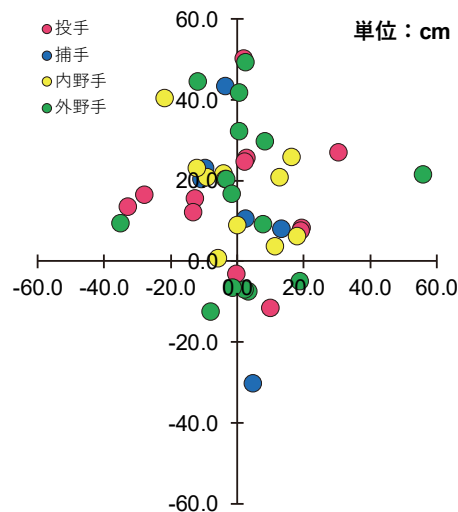


図2: ポジションごとのコントロール

まとめおよび今後の展望

スローイング能力向上を目的とした取り組みの1つとして、スローイングテストを行いスローイング能力の定量化を図った。その結果、ポジションごとのスローイング能力の特性を確認することが出来た。今後の練習内容や取り組み方を観察して、再テストでスローイング能力の変化を検討する。